スタンフォード大学海外研修報告

茨城県立医療大学放射線技術科学科
門間正彦

スタンフォード大学のルーカスセンターにおいて，7 月 23 日（月）から 7 月 27 日（金）まで研修を受けてまいりましたので，報告をさせていただきます．

1．期待していたこととその結果

研修は一週間にわたって，テーマ毎に講義とワークショップを組み合わせる形で行われ，研究の第一線で活躍されている著名な先生方による講義を聴くことができました．講義内容は概要の範囲内であると感じましたが，テーマ毎に良くまとめられた構成でした．私の関心は MRI に関してで，特に fMRI や MRI の性能評価に関してです．残念ながら，昨年の研修で行われた fMRI のリアルタイム BOLD の実習は行われず，また MRI の性能評価といった基礎的な内容についてもその詳細について知ることはできませんでした．しかし，CT，MRI，PET に関する臨床に関しては一部最新の知見を含めて講義していただいたと思っています．

2．日本と米国の違いをどう感じたか

日本でも最近聞くことがある 3D ラボセンターは放射線技師により CT や MRI の画像を専ら処理する部門ですが，個人による技量の差が出にくいようにほとんどの業務はマニュアル化されています．このようなマニュアル化により品質管理を徹底し，効率的に業務を行うというようなスタンスは米国らしく，業務や組織の見直しに消極的である日本にとって参考になるのではないかと思います．残念ながら，4〜5cm ほどの分厚いマニュアルの内容まで説明を聞くことができませんでしたが，業務上の支障はほとんどないとのことでした．

3．最も印象に残ったこと（セミナーとイベント）

研修に行く前に，スタンフォード大学ルーカスセンターに関する情報を調べたところ，前年度の年次研究報告書が見つかり研究の概要を事前に知ることができました．CT や MRI，Molecular imaging 等に関して基礎から臨床まで，さまざまなアプローチで研究が行われていることがわかりました．実際に研修に行ってみると多くのフェローや大学院生が研究を行っており，組織的な研究体制が確立しているように感じました．ルーカスセンター内にはパーティションで仕切られた研究室があり，各自のペースで研究が進められているようでした．

4．今後の海外研修のあり方に期待すること

研修期間中，1 時間位かけてスタンフォード大学メディカルセンターの CT や MRI の検査室を見学する機会がありました．日本の医療しか知らない者が海外の医療現場を見ることができたのは大きな収穫でした．今後，可能であればもう少し時間をかけて見学することにより，いっそう充実した研修になるものと思います．

今回の研修の講師は放射線科医や放射線技師でしたが，米国では医学物理士の業務上の役割も大きいものと思いますので，ぜひ話を聞く機会を設けていただけたらと思います．

一週間の研修はあっという間で，その場で見たり聞いたりということにも限度があります．研修に行く前に，米国の医療制度や著名な講師の先生方の研究内容を調べておくといっそう研修の成果が上がるものと思います．

最後に，このような機会を与えてくださった日本放射線技術学会および関係者の皆様に感謝を申し上げます．今後，多くの会員が海外研修に参加し学会の発展に貢献できるよう，本事業の発展的な継続を強く希望いたします．

7T の動物用 MRI 装置．30cm までの小動物の撮影が可能．据付作業中で磁場はかかってないため，近くで撮影できました．